

2019年10月23日(水)

老球の細道506号

## できる人は何が違うのか

会津バスケットボール協会 室井 富仁

司馬遼太郎著『竜馬がゆく』を読んで「この世に生を受けたるは、事をなすことにあり」に出会った。私も生きて証しのために何か成し遂げたいと思った。それから、あらゆる分野で偉大な業績を成し遂げた人たちは、私のような凡人と何が違うのか、そして凡人はどのようにすれば偉大なことを成し遂げられるのかを興味深く観察してきた。

最近よく耳にするのは、専門分野と関係がなさそうなことが、結果的に専門分野を極める原動力となったということである。「専門家」になるのではなく「千門家」になれるということであろうか。役に立たないことなど何もない。

スマホなどに使われる「リチウムイオン電池」の基本技術を開発し、ノーベル化学賞が決まった吉野彰さんは、「やわらかさと執着心」が信条だという。吉野さんは化学が専門だが、大学時代の最初の2年間は考古学を勉強したという。教養課程はできるだけ専門以外の知識を身につけようと。そして専攻した石油化学が最先端なら、一番古い歴史、考古学をやってみようと思ったそうだ。考古学は全く異なる分野であるが、考古学の研究は化学とよく似たところがあるという。「事実に対して非常に謙虚。どちらかという、実験科学です。いかに新しいデータを世界に先駆けて提示できるか。そこが共通しています」。

また、毎年ノーベル文学賞の候補者にリストアップされる作家の村上春樹さんは、イタリアの文学賞受賞で講演をした際、次のような話をしたと新聞に掲載されていた。

「1960年代のカウンターカルチャーを経ていたので、大学を出て企業に勤める気はありませんでした。当時はジャズバーを経営していたが、リズムは文学において不可欠であり、店に立って昼夜聴いていた音楽が小説家になるための訓練になっていた」

千葉ロッテマリーンズ広報メディア室長の梶原紀章さんは、お客さんを球場に集めるために、日々新しいアイデア作りに追われている。「既存のものを破壊し、新たなものを創造する姿勢を忘れてはいけない」。広報を目指す学生にそのような意識を持つことを教える。その際、自分が好きなスポーツ以外の競技を観戦することを勧める。プロ野球ばかり見ていると、どうしても視野が狭くなる。「野球はこうだけどサッカーはこうだった。じゃあ、プロレスや競馬ではどうだろう」と比較すると、新しい気づきがあるという。

先日スタートしたバスケットB1の開幕戦「川崎対宇都宮」のオープニングセレモニーでは落語が行われた。意表をついたアイデアで感心してしまった。

バスケットボールワールドカップで男子日本代表は最下位に終わったが、ラグビーは見事な結果を残した。その立役者の一人、ドレッドヘアと口髭でスクラムの最前線で戦った堀江翔太選手は中学時代バスケット部に所属していた。堀江選手はバスケットをプレイしたことでボディバランスやボールハンドリングの技術が身に着いたと語っている。

最後に、米国の伝説の女優マリリン・モンローは、トップスターになっても、また「新しい自分」を演じるために、演技力を高める専門学校に通い、役者を志す素人たちと一緒に勉強した。読書や歴史の勉強にも勤しみ、常に教養を高めることを怠らなかったという。

できる人は狭い世界に閉じこもらず、多くのことを経験し、それらのエキスを自分の専門に昇華する。そして、頂点を極めても常に基本に戻ることを忘れない謙虚さを持つ。